

# 土方巽

言葉と身体をめぐって

## 2009年6月20日(土)

会場：京都造形芸術大学 映像ホール（人間館地下1階）

料金：無料（定員100名／予約優先）

※参加ご希望の方は、下記予約先まで、電話、ファックス、メールで「氏名、希望予約数、連絡先」をお知らせの上、お申し込みください。

★上映 15:00スタート（上映時間71分）

『夏の嵐』（出演：土方巽ほか/企画・監督：荒井美三雄）

★当日は、オープンキャンパスを開催中につき、本学舞台芸術学科「ダンスコース」の関連上映会も同会場にて午前中より行っています。

★公開研究会 16:30～19:30

### 第一部：基調発表

- 1) 宇野邦一 「剥がれた体の薄い深淵図」
- 2) 國吉和子 「向こう側の目玉について」
- 3) 田中弘二 「「舞踏の欲望」について」

### 第二部：ディスカッション

パネリスト：宇野邦一（フランス文学・思想）  
國吉和子（舞踊研究・批評）  
田中弘二（土方巽研究）  
松田正隆（劇作・演出）  
三浦基（演出）  
八角聡仁（批評）  
森山直人（演劇批評）  
山田せつ子（コレオグラファー・ダンサー）

主催・問合せ 京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター  
〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 TEL 075-791-9437 FAX 075-791-9438  
MAIL info@k-pac.org WEB <http://www.k-pac.org/>

予約・申し込み 京都芸術劇場チケットセンター  
TEL 075-791-8240（平日10:00～17:00）

## ～言葉と身体をめぐる-土方巽

京都造形芸術大学舞台芸術研究センターでは、2006年から2年間に渡り、ジャン・ジュネの著作『恋する虜』を軸に〈身体/言葉/イメージ〉を様々に横断しながらダンスのプロセスを探る作業を行いました(\*)。引き続き今年度は、ダンスの歴史に前例のない亀裂を生じさせ、世界的に影響を及ぼした舞踏家・土方巽の身体思想に向かい合う研究会を企画しました。土方巽が残した舞踏は舞踏家によって多様な形で継承されており、更にコンテンポラリーダンス作品にもその思想は深く影響を及ぼしています。第一回公開研究会では、そうした舞台作品から少し距離を置き、遺された書物『病める舞姫』『美貌の青空』などをテキストに土方巽が晒した身体の思想が、言葉が、今、私たちの前にどのように現われるかを見出していく時間を持ちたいと思います。

長年、『病める舞姫』を中心に土方巽研究を続けておられる國吉和子さん、生前の土方巽と言葉を通して稀な出会いをされた宇野邦一さん、ご自身のブログで土方巽研究を発表し続けておられる田中弘二さんにそれぞれの視点からお話いただきます。その後、演劇の現場におられる松田正隆さん(マレピトの会代表)、三浦基さん(地点代表)にご参加いただき、対話の時間を持ちたいと思います。

企画・山田せつ子(舞台芸術研究センター主任研究員)

\*ジャン・ジュネに関する当センターの活動内容については、『舞台芸術』11号/13号(舞台芸術研究センター発行)をご参照ください。

## ★土方巽とは★

1928年、秋田県生まれ。舞踊家、振付・演出家。第二次大戦後、日本の現代芸術に大きな影響を与えた「暗黒舞踏」の創始者。秋田県立秋田工業学校卒業後、市内で増村克子(江口隆哉門下)に師事し、ドイツ系の新興舞踊(ノイエ・タンツ)を習得。上京して安藤三子舞踊研究所に入門、26歳でモダンダンスとして初舞台を踏む。1959年全日本芸術舞踊協会新人公演で発表した『禁色』を機に、モダンダンスから離脱し、大野一雄らを巻き込み美術家との共同制作を開始。初リサイタルで『種子』『暗体』『処理場』(’60)、『あんな』(’63)、『バラ色ダンス』(’64)、『土方巽と日本人―肉体の叛乱』(’68)等など、挑戦的で反社会的な作風をもって、1960年代における日本の前衛芸術の担い手の1人となった。その後、『四季のための二十七晩』(’72)、『静かな家』(’73)など、「犠牲大踏鑑」を冠した一連の作品を通して独自の方法論を追究した。土方に私淑する者も多く、後に国内外で「舞踏(Butoh)」と呼ばれる潮流の始まりを画した。1974年に弟子の芦川羊子を中心に「白桃房」を結成、アスベスト館にて『ひとがた』、『鯨線上の奥方』など、3年間に連続16本の作品を発表。1977年には大野一雄舞踏公演『ラ・アルヘンチーナ頌』を演出するなど、外部に向けた活動を開始。1985年には『東北歌舞伎計画Ⅰ～Ⅳ』の連作をスタジオ200で発表したが、翌86年1月に死去(享年57)。著書に『犬の静脈に嫉妬することから』(’76年)、『病める舞姫』(’83年)、遺文集『美貌の青空』(’87年)など。また、黒木和雄監督『日本の悪霊』(’70)、大内田圭弥監督『風の景色』(’76)、小川紳介監督『1000年刻みの日時計』(’85)等など、映画出演も数多い。’98年には著作や舞踏譜を集めた『土方巽全集』全2巻(河出書房新社)が刊行された。

## 第二部ディスカッションパネリスト プロフィール

宇野邦一(うの・くにいち)

1948年生。京都大学、バウhaus第8大学で学び、思想・芸術・文学を横断する批評、ドゥルーズ、アルト、ベケットなどの翻訳が主な活動。立教大学映像身体学科教授として、演劇、ダンス、映画などの創作・批評の基礎になる身体論、身体哲学を構築する。主な著書に『アルト―思考と身体』(白水社)、『ドゥルーズ流動の哲学』(講談社)、『ジャン・ジュネ』(以文社)、『破局と渦の考察』(岩波書店)、『単なる身体』(平凡社)など。

國吉和子(くによし・かずこ)

舞踊研究・評論。多摩美術大学客員教授、早稲田大学、立教大学などで舞踊理論、身体文化論、パフォーマンス・アーツ史の講義を担当。著書に『夢の衣装、記憶の壺―舞踏とモダニズム』、編著に『見ることの距離』(市川雅道稿集)。

田中弘二(たなか・こうじ)

1955年生。金沢大学在学中に土方巽構成作品「埃を浴びた堂のような男」(金沢舞踏館公演)に出演参加。パキスタンでのイスラム研究、インドでの仏教研究を経て舞踏の表現に関わるにいたる。2003年より土方巽研究を始める。

松田正隆(まつだ・まさたか)

劇作家・演出家。『海と日傘』『月の岬』をはじめ、数々の戯曲賞を受賞。舞台戯曲の他、黒木和雄監督作品『美しい夏キリシマ』など映画脚本も手がける。2003年より「マレピトの会」を結成、演出を行う。京都造形芸術大学客員教授。

三浦基(みうら・もと)

演出家。劇団「地点」代表。1999年より2年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリに滞在する。2007年、チェーホフ作『桜の園』により文化庁芸術祭賞新人賞受賞。2008年度京都市芸術文化特別奨励者。

八角聡仁(やすみ・あきひと)

1963年生。批評家。近畿大学文芸学部教授。京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員。演劇、ダンス、写真、映画、文学などに関する論考多数。編著に『現代写真のリアリティ』(角川学芸出版)ほか。

森山直人(もりやま・なおと)

1968年東京生。演劇批評、現代演劇論、表象文化論。京都造形芸術大学舞台芸術学科准教授、同大学舞台芸術研究センター主任研究員、および同センター発行の機関誌『舞台芸術』編集委員。京都芸術センター主催事業「演劇計画」企画ブレーン(2004～)。論文に、「過渡期としての舞台空間―小劇場演劇における「昭和30年代」」、「(ドキュメンタリー)が切り開く〈舞台〉」、「分断と共感―東京国際芸術祭「中東演劇シリーズ」を振り返って」等。

山田せつ子(やまだ・せつこ)

明治大学演劇学科在学中、笠井敬の主宰する舞踏研究所「天使館」に入館。独立後ソロダンスを中心に独自のダンスの世界を展開し、国内外での公演も多数行い、日本のコンテンポラリーダンスのさきがけとなる。1989年よりダンスカンパニー批評系を主宰、『翔ぶ娘』『愛情十八番』などの作品を発表。2000年より京都造形芸術大学 映像・舞台芸術学科教授として8年間ダンスの授業を持ち2009年より客員教授。最近の作品『奇妙な孤独』『ふたりいて』など、ダンス・演劇などのジャンルを超えて新しい作品創りを始めている。著書『速度ノ花』(五柳書院)

この研究会では、今後も公開研究会を行って参ります。2010年3月12～14日には一年間の最終研究会として京都芸術劇場studio21にてシンポジウム&ワークショップを行います。今後の予定については、自センターHPにて随時情報を掲載いたします。

## ★交通アクセス★

京都造形芸術大学  
〒606-8271  
京都市左京区北白川瓜生山2-116

■JR「京都」駅、京阪「三条」駅、阪急「河原町」駅から  
→京都市バス5番「岩倉」行き乗車、  
「上終町・京都造形芸大前」下車  
(京都駅から約50分)

■京都市営地下鉄「丸太町」「北大路」駅から  
→京都市バス204循環に乗車、  
「上終町・京都造形芸大前」下車  
(約15分)

■京阪電鉄「出町柳」駅から  
→叡山電車に乗り換え、「茶山」駅下車、徒歩10分  
→タクシー10分

■駐車場はございません。

